

説教 『グズグズする能力』 山本 護 牧師
聖書 民数記 9:10~12/マルコによる福音書 14:18~21

過越の食事の席で、イエスは唐突に「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている(マルコ 4:18)」と告げた。唐突な裏切り予告だが、弟子たちには暗い予感があった、と思う。殺意を含んだ不穏な空気(14:1)、「埋葬の準備(14:8)」という不吉な言葉、挙動不審なユダの行動(14:10)が相まって、過越の宴席を妙に重苦しくしていた。

裏切り予告に対して、「弟子たちは心を痛めて、[まさかわたしのことでは]と代わる代わる言い始めた(14:19)」。この口ぶりから弟子たちの心情が読み取れるが、察したところで本筋ではない。またユダだけを悪人にして(14:11)済む勸善懲惡話でもなく、十二弟子(14:17)すべてが裏切り者となる可能性に注目したい。それにしてもユダ、出家してイエスに従うほどに求道的な男が、なぜ師を引き渡す裏切りに走ったのか(14:10)。真っ直ぐすぎて危ういイエスを抑えるためか、期待外れによる逆恨みか、師とその集団を守るためか。いずれによせ裏切りは、従うのではなく、従わせようとした結果だ。

教会においても、自分の願望に合致すれば受け入れ、願望通りでないと幻滅する者がいる。とはいえ、グズグズしている間に思い直すこともあったりして、教会生活が続いていく道は個々さまさま。弟子たちが「心を痛める(14:19)」ことができたのは、ユダのようにきっぱり行動せず、グズグズしていたから。そう考えると、逡巡して動けないでいることにも、案外大きな可能性がありそうだ。

「裏切り」はユダだけの罪ではなく、十二弟子全員に関係する事柄。であれば今、十数億人いる世のキリスト者すべての問題なのか。確かにそうだが、分母を大きくして「私の裏切り」を薄めてはなるまい。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ(14:20)」。イエスとソース鉢を一つにするほど近い弟子が裏切る。それほどに親密なキリストを「飲食する(聖餐)」私たちの、いや「私の」裏切りなのだ。イエスと極めて親密な罪人が、「裏切るかもしれない」と自らにおののく者が、イエスと共に過越の苦菜を食べ(民数 9:11)、十字架の苦杯を飲む(マルコ 14:24)。

ユダは金目当てで裏切ったわけではない(マタイ 27:3~4)。彼の迅速な行動力は、世では有能だと評価されよう。だがペトロのような「グズグズする能力」が足りなかった。だから己が後悔を受け入れられずに自死する(27:5)。イエスの愛に心打たれながら、「有能さ」が勝って彼自身の炎を吹き消した。

「人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった(マルコ 14:21)」。裏切ったから「生まれなかった方がよかった」のでは決してない。きっぱり行動する「有能さ」が、己に灯された神の愛を消してしまふ。そんな自力頼みが、ユダを「不幸(14:21)」にした。「人の子は去って行く」。他の弟子はグズグズしていて、十字架に秘められたとてつもない愛に出会えた。換言すれば復活とは、キリストの「とてつもない愛」に遭遇しえた「弟子側」の驚くべき開眼だろう。「一つの鉢に食べ物を浸す(14:20)」ほど、イエスは親密に私たちの傍らにおられる。ゆえに、私たちの「グズグズする能力」を喜ぼうではないか。



【おまけのひとこと】

逡巡や躊躇 整理がつかないのは 論理に偏らず 世界を感知する身体の間々が思い巡らせているから 逡巡はキリストの未知なる扉 躊躇は己に注がれる愛の発見 さらに身体の思考を重視せよ